



端午の節句



現代では、『こどもの日』として祝われる5月5日。この日はもともと五節句の端午の節句にあたります。

端午の端ははじめという意味で、端午は5月最初の午(うま)の日のことでした。それが、午(ご)という文字の音に通じることなどから、奈良時代以降、5月5日が端午の節句として定着していきました。

江戸時代に入り、勢力の中心が貴族から武家に移るとともに、菖蒲(しょうぶ)の音が、武を重んじる尚武(しょうぶ)と同じであることから、端午の節句は尚武の節句として、武家の間で盛んに祝われるようになりました。この節句は、家の跡継ぎとして生まれた男の子が、無事成長していくことを祈り、一族の繁栄を願う重要な行事となったのです。3月3日のひなまつりが、女の子のための節句として花開いていくのに呼応するように5月5日の端午の節句は、男の子のための節句として定着していきました。

鎧や兜を飾ることは、武家社会から生まれた風習です。身の安全を願って神社にお参りするときに、鎧や兜を奉納するしきたりに由来しています。鎧や兜を戦争道具と受け取る考え方がありますが、武将にとっては自分の身を護る大切な道具であり、シンボルとしての精神的な意味がある大切なものでした。現在は鎧兜が身体を守るものという意味が重視され、交通事故や病気から大切な子どもを守ってくれるようにという願いも込めて飾ります。



鯉のぼりは、江戸時代に町人階層から生まれた節句飾りです。鯉は清流はもちろん、池や沼でも生息することができる、非常に生命力の強い魚です。その鯉が急流をさかのぼり、竜門という滝を登ると竜になって天に登るという中国の伝説にちなみ(登竜門という言葉の由来)子どもがどんな環境にも耐え、立派な人になるようにとの立身出世を願う飾りです。

端午の節句のお祝いは、本来5月5日の節句当日ですが、前の日の晩(宵節句)にお招きしてお祝いをしてもらいましょう。両家の両親やお祝いをいただいた方、普段親しくしている方たちを招きます。ごちそうは、鯉や栗、ちまきや柏もちがつきものです。



また、端午の節句と菖蒲はきってもきれないものです。菖蒲は悪鬼を払うといわれ昔から端午の節句に使われています。家の屋根や軒先にさしたり、お酒にひたして菖蒲酒にして飲んだりします。また、菖蒲枕といって枕の下にしいたり、お湯の中に入れて菖蒲湯にして入ります。いずれも身体に悪い気がつくのを防ぐという意味から使われるならわしです。

